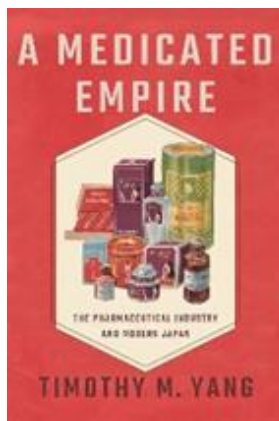


ティモシー・M・ヤン著『薬の帝国: 製薬業界と近代日本』コーネル大学出版、2021年
Timothy M. Yang, *A Medicated Empire: The Pharmaceutical Industry and Modern Japan*. Ithaca and London: Cornell University Press, 2021. xviii, 335 pp.
ISBN 9781501756245



2020年春に始まった新型コロナウイルスの世界的流行は、既に全世界で600万以上の死者を出している。人口3.3億の米国の死者数は100万人を超えたが、人口1.26億日本の死者数は3万人を超えた程度だ。¹ しかし、流行や死者数を軽減したウイルスワクチンの開発は、アストラゼネカ（英、スウェーデン）、バイオンテック（独）、ジョンソン・エンド・ジョンソン（米）、モデルナ（米）、ノヴァヴァクス（米）、ファイザー（米）等、欧米の製薬会社が先行して、日本の製薬会社は大きく後れをとった。² ワクチンの調達・接種は、まず開発国、そして資金のある先進国優先で、昨年インドや南アフリカ共和国は、ワクチン製造のノウハウ開放によって、自国でワクチンを製造、調達、接種を行いたいと申し入れたが、欧米の製薬会社は受け入れなかった。³ この決断には、製薬会社は命を救うという人道主義的使命と巨益を生む知的財産権を守るという企業使命という相反する価値観が垣間見られた。⁴ パンデミックの収束が未完了の現在、私たちがこうした製薬業界の問題についての記述や論考をメディアで見聞きする機会も多い。

¹ “COVID-19 Dashboard by the Center for Systems Science and Engineering (CSSE) at Johns Hopkins University (JHU),” accessed June 14, 2022, <https://coronavirus.jhu.edu/map.html>.

² Tanaka Hidemasa, “Wakuchin gaikoku izon no kutsujoku: Shingata korona de rotei shita Nihon no rekka,” *Ronza*, May 27, 2021, accessed June 14, 2022, <https://webronza.asahi.com/politics/articles/2021052500010.html>.

³ Walden Bello, “The West Has Been Hoarding More Than Vaccines,” *New York Times*, May 3, 2021.

⁴ Eric Sagonowsky, “Pfizer, Moderna, AZ and other COVID Vaccine Companies Face Urgent Calls to Ramp up Access around the World,” *Fierce Pharma*, September 22, 2021, accessed June 14, 2022, <https://www.fiercepharma.com/pharma/pfizer-moderna-az-and-other-covid-19-vaccine-companies-face-renewed-calls-to-vaccinate-world>.

そんな私たちに、ティモシー・M・ヤンはその新著『薬の帝国: 製薬業と近代日本』で、コロナ禍の製薬業界をどう捉えるか示唆に富む多くの情報を供してくれる。現在ジョージア大学で教鞭を取っている著者は本書で米国留学帰りの星一(1873-1951)という人物(SF作家の星新一の父)が一代で起こし、そして失った星製薬を軸に、製薬業界と日本の近代化、また日本帝国の植民地経営との関わりを、また、医療や、資本主義をグローバルな視点から俯瞰している。成功と失敗、希望と失望、と波乱に富んだ歴史を持ち、原料調達、また市場開発に、台湾、朝鮮、さらにはペルー、トルコ、イランまで広がりを見せる、星一経営下の星製薬は、読者をひきつける格好のケーススタディである。著者はこの題材を、五百を超える英語、日本語、中国語、さらに韓国語で書かれた史料文献にのっとり分析している。

この本は序章の後、四部、八章(各部に二章)で構成されており、第一部では、製薬業界企業と国家権力との関係、第二部では、戦間期日本の売薬消費のパターン、第三部では星製薬によるアヘン(鎮痛剤であるモルヒネ・ヘロインの原料)の売買、そして第四部では、第二次世界大戦に至るまでと大戦中の製薬業界と軍部の協力体制に焦点を当てている。第一章では明治日本の製薬業界の黎明期、企業の勃興、医薬市場の発展、また官憲の医薬販売消費への統制を、第二章では医学や薬学を専攻したわけでもない星一が政財界の重鎮とつながり、1906年の湿布薬イヒチオール製造販売成功を足掛かりに五年後に星製薬を立ち上げ、以後拡大していった様子を描く。第三章では、「クスリはホシ」、「親切第一」をうたい文句に、また「自助投薬(self-medication)」、「医療の民主化(democratization of medicine)」を経営理念に掲げ、医師による医療を受けずとも、自社の売薬を使用することで患者自らの治療が可能であると広告周知に励んでいたこと、また第四章では、星がアメリカ仕込みのフランチャイズ方式を採用し、特約店員に星製品の知識や企業理念を学校まで作って教育し販売拡張に邁進していった経緯を検討している。さらに第五章では1920年代半ばに、当時の日本国内の政党対立そして国際的な麻薬制限強化を背景に起こった星製薬アヘンスキャンダルを、また第六章では醜聞で業績とイメージが著しく低下した星製薬の必死の企業改革とその失敗、給料の遅配・無配に憤った従業員が起こした労働闘争を考査している。第七章では、世界恐慌下、経済的自給自足の必要にかられた日本における薬剤業界の軍部との協力体制、特に星製薬が台湾でのキナ栽培(マリア薬キニーネの原料)、ペルーでのキナおよびコカ(コカインの原料)栽培を行っていたこと、また台湾では高地のキナ栽培に「蛮人」問題の解決という社会正義の要素を盛り込んでいたことを、第八章は、1937年の支那事変以降戦時体制に入った日本で、国家と帝国に必要な健康な国民を作る会社として、星製薬がさらに軍部との協力を深めていった様子、そしてファシスト体制での製薬業界の合併統合等を扱っている。エピローグでは戦後の星製薬が、薬物製造禁止に反して、モルヒネの製造を続けていたことが占領軍に明らかにされ、再びドラッグスキャンダルにまみれた企業として経営不振に陥ったこと、その打開策のためにペルー行きの途上、星

一は1951年にロスアンゼルスで客死したこと、星の長男、新一はほどなく傾いた会社を売却、作家に転身、人手に渡った会社は戦前の隆盛の影はなくとも、現在まで星製薬の名前で存続していることなどを略記している。

研究の成果として著者は、星製薬が国家・帝国建設に影響のある政財界のリーダー（例えば、政友会のリーダーで元首相、朝鮮で暗殺された伊藤博文、星と同じ福島出身の、台湾内政局長だった後藤新平）による庇護を受けていたこと、20世紀前半の日本の売薬は、ドイツにならって「無害」なら効果がなくても販売できたという事実（73）、星製薬の成功は、研究開発ではなく、マーケティング戦略の賜物、またそうした売薬販売のための宣伝活動は近代日本の中産階級文化形成に貢献したと指摘する。研究開発が二の次になっていた歴史はコロナ禍の日本製薬業界のワクチン開発の遅れのニュースを彷彿とさせるが、ヤンは、エピローグで戦後の研究開発への取り組み強化が戦前との違いであると簡単に指摘している（235）。本書は星一亡き後は扱っていないが、戦後の日本製薬業界の詳しい分析も待たれる。

本書は、星製薬が作った、特約店従業員用の教育施設から発展した星薬科大学に保存される星製薬の出版物や社史等の一次史料、また星新一が書いた父親の自伝などを使って、星製薬の企業史を再構築している。しかし、彼の分析は社史にありがちな、創業者の美化、会社理念の受け売り、創業者やその家族そして社員による、会社の失敗の弁明、また日本史の一般的解釈とは一線を画する。例えば、近代の衛生思想は明治起源というのが通説だが、著者は日本でも植民地の台湾でも治安維持、犯罪防止、相互監視に役立った前近代時代の隣保自治制度（江戸時代の五人組制度、清朝の保甲制度）が近代日本の衛生政策の実施に活用されたこと、また何にでも効く万能薬が前近代的、ある症状に効く特効薬が近代的という薬の常識も、江戸時代の富山の薬売り制度と、星製薬の近代的な売薬流通制度との相似点を指摘し、二十世紀になっても星製薬のホシの胃腸薬など万能薬が幅を利かせていた事実をもって、歴史の連続性を指摘している（23、25、32、80、86、111）。また星製薬が繰り返し強調した、田舎の庶民が大会社の社長となった桁外れの立身出世という見解を鵜呑みにせず、実際は、星の実家が裕福だったこと、彼がコロンビア大学の修士号を取得して、政財界の重鎮と知己を得ることができるほどのいわば一握りの特権階級出身だったと反論する（39）。また、ホシの売薬が親切第一、人のため、医療の民主化のためという自画自賛の大宣伝を繰り返した史料がどんなにあっても、星一の貪欲なまでの利益追求の側面（コロナ禍のワクチン製造会社を思い出させる）、日本国内では禁止されているアヘン販売を、台湾では平気で続けるという矛盾、また薬効と薬毒の二面性、さらには、戦時中は人を健康に生かすことが、ほかの人を殺すことになる二面性など、一義的な解釈に数々の疑問を投げかけるのである（26、44-45、64-65、136、142、230）。また、星一が自ら家族的、精神的、協力的と評した、星製薬のフランチャイズ式販売網の起源が

アメリカのフランチャイズシステムにあることを指摘するなど、一見日本的な家族主義や集団主義も、実は日本的でもなんでもないことを示している（108、237）。

著者は星製薬が、販売促進や広告に統計を有効利用していたことを明らかにしているが（84、86、89、114）、著者自身の駆使した統計資料は質においても量においても読者をうならせる（43、61、64、75、76、112、113、143、152、164、165、171、190）。また薬の化学成分の説明（例えば 90）や、企業史には、あまり登場しない女性に関する記述も多い。星製薬の販路拡大の対象となっていた、家族の健康を守る主婦（87–88）、そしてそんな主婦に、もっと商品を買ってもらうために雇われた女性販売員（128）、『女工哀史』の作者細井和喜三の内妻で、細井の死後自らの星製薬での就労体験を書き表した高井としを（119）、また星製薬の業績悪化の際に解雇に追い込まれ、労働運動に参加した工女（172–73）等々が、女性の存在抜きで語る企業史は片手落ちであると主張しているかのようである。

多くを学べる本書であるが、さらに知りたい点がある。コロナウイルスの世界的流行の約百年前、1918 年から世界を襲ったインフルエンザパンデミック（スペイン感冒、流行性感冒、または流感）と「ホシ風薬」（当時は風邪を風と表記）や「ホシ感冒錠」の関係である。本書掲載の星製薬の広告（Figure 3.1、Figure 3.10、Figure 4.3）で、1913 年にはすでに風薬が存在していたことと、1923 年には感冒薬も存在していたことがわかる。第三章は、「ホシ胃腸薬」を例としてホシの売薬販売について考察しているが、販売促進のため、広告宣伝に大きな投資をして収益増加を図っていた星製薬が、日本帝国の内地で 45.3 万人、外地で 28.7 万人の死者を出したインフルエンザという感染症に対処できそうな「ホシ風薬」をすでに持っているのに、みすみすビジネスチャンス逃したのであろうか。⁵ 感冒錠は、パンデミックを契機に星製薬の製品として登場したのであろうか。細菌より極めて小さいウイルスの存在は 1935 年まで可視化されず、医学者たちはインフルエンザの病原は細菌であるという仮説に基づいて当時躍起になって病原細菌の特定、予防、治療法を探していた時期である。⁶ どちらにしてもホシの売薬は効果がなかつただろう。しかし星製薬はそれを統計的に把握していたのであろうか？ 新薬発売前の臨床試験は行っていたのだろうか、もし行っていたとしたら、ある階級や、民族弱者を被験者として使っていたのだろうか。「ホシ風薬」と「ホシ感冒錠」の成分上の違いはなんだったのだろうか。そして、その答えは星製薬の前近代な万能薬、近代的な特効薬、そして近代的で科学的な星の売薬という分類のどこに属するのだろうか。

⁵ Hayami Akira, *Nihon o osotta Supein infuruenza: Jinkō to uirusu no Dai-ichiji Sekai Taisen* (Tokyo: Fujiwara Shobō, 2006), 426.

⁶ Hayami, *Nihon o osotta Supein infuruenza*, 434.

ヤンの新著は星製薬の経営史を中心にその記述を批判的に検証し、十九世紀末から二十世紀前半の日本人米国留学生、日本帝国、製薬製造販売、麻薬、医学、広告宣伝と消費文化の歴史を、グローバルに分析し、化学、統計、また理論（フォーコーの生政治学 Bio-politics）などの多岐にわたる文献を丁寧に引用、活用している。本書は、すでに Hagley 賞（経営史）受賞という評価を得ている力作である。英語圏での日本史、科学史、比較帝国史、比較経営史などの授業で特に役に立つであろう。大学院の授業で使われれば、研究や論文執筆の取り組み方のお手本としても有用だろう。コロナ禍で薬剤開発、販売に関する興味が高まっている現在、多くの研究者、学生に読んでもらいたい良書である。

大坪寿美子 Sumiko Otsubo

メトロ州立大学 Metro State University



New articles in this journal are licensed under a Creative Commons Attribution 3.0 United States License.



This journal is published by the University Library System, University of Pittsburgh as part of its D-Scribe Digital Publishing Program and is cosponsored by the University of Pittsburgh Press.